

「ハエー」

「作品も少々エラすぎますが。それより、箱なら箱、お家ならお家、人形なら人形でいゝぢやありませんか。子どもはそれを作らうと思つて作つたのですから」

「ほめますことは」

「ほめたりなんかしなくてもいゝでせう」

「でも、ほめてやると喜びますので」

「そりやあ、悪い氣もちもしないでせうが、ほめるのも出来ばへをほめるよりも、何を作らうとしてゐるか、その心もちを認めてやるがいゝのですよ」

「認めると申すと、これは確に人形に見へるねども申してやりますのですか」

「これはおそろしと」

「では」

「おゝかあいらしい。でいゝぢやありませんか。箱でしたら、何を入れませうねえ。家でしたら、お人形さんのお家ですか、お人形さん喜ぶでせうね。といつた具合に」

「子どもも喜ばせうねえ」

「喜びますども。成績乙なんていやです。甲だつていやですよ。折角一心に作つたものを、いきなり点数で鑑定されるなんて、子どもだつていやでさあ」

「つまり、まづくてもよろしいので」

「まづいがいゝといふ譯はありませんがね」

「上手下手以上の意味がございますのですね」

「そうそ。左様々々。手藝學校附屬幼児部ぢやありませんものね。」

「ホ、ホ、ホ、まさか、誰れもそんなこと」

「でも、練習々々、器用々々、成績々々、上手々々、なんてばかり言つてゐると、つまり、そんなことになつて仕舞ひますよ」

「まさか、ホ、ホ、ホ、」

「ハ、ハ、ハ、。これはじやうだんです

が、幼稚園でしてゐる事のほんたうの意義が、御家庭でもよく分つてゐて頂けないと、お子さんの爲によくありませんね。折角の教育目的が通りませんからね」

おはなしの庫

建國のおはなし

○カミサマノオハナシ 藤田美津著

大阪市住吉區赤橋幼稚園母の會發行
上下各二巻 定價貳圓六拾錢

ことしに限つたことではありませんが、わけても此の二千六百年。我國建國のお話を子どもにどうしようか。古事記をまる讀みにしても分らないし、がしがし、いゝお話はその中に澤山ある。それを子どもに向くやう書きなほした本が此の本です。他にもいろいろありませうが、この本をおすゝめしたいものです。藤田さんの苦心で總カタカナで、小學校の子どもには自分で讀めるやうに出来てゐます。お母さんのいゝタネ本として、幼児にも話して下さるといゝと思ひます。挿繪は幼児向きにすてきです。